

平成 29 年度 第 1 回北海道地方独立行政法人評価委員会公立大学部会 議事録

1 開催日時

平成 29 年 7 月 27 日（木） 9：30～11：15

2 開催場所

札幌医科大学基礎医学研究棟 5 階 共通会議室

3 出席者

【出席委員】

谷山 弘行 部会長 （学校法人酪農学園 酪農学園大学 理事長）

庄司 正史 委 員 （公認会計士）

鈴木 将史 委 員 （国立大学法人 小樽商科大学 教育担当副学長）

田中 繁道 委 員 （医療法人溪仁会 理事長）

古谷 雅代 委 員 （株式会社エクサネット HAL 代表取締役会長）

【欠席委員】

なし

4 配付資料

資料 1－1 平成 28 年度に係る業務の実績及び第 2 期中期目標期間（平成 25～28 年度）業務実績報告書

資料 1－2 業務実績報告書に係る事前質疑一覧

資料 1－3 第 1 期中期目標期間評価結果への措置状況

資料 2－1 平成 28 年度財務諸表

資料 2－2 平成 28 年度決算報告書

資料 2－3 平成 28 年度事業報告書

資料 2－4 監査報告書等

資料 3 平成 29 年度北海道地方独立行政法人評価委員会審議スケジュール

参考資料 北海道公立大学法人札幌医科大学年度評価実施要領

5 開催概要

【事務局】

- ただいまから平成 29 年度第 1 回北海道地方独立行政法人評価委員会公立大学部会を開催させていただきます。本日の部会の流れにつきまして、お手元の次第に沿って説明させていただきます。最初の議事は、平成 28 年度業務実績報告書等に係るヒアリングでございます。時間は 1 時間 20 分ほどを予定

してございます。続きまして、ヒアリング終了後、休憩を挟みまして次の議事でございます、業務実績報告書等に係る意見交換会を1時間ほど予定してございまして、最後に事務局から今後のスケジュールについてご説明いたします。それでは、開催にあたりまして、谷山部会長からご挨拶の方お願いいたします。

【谷山部会長】

- おはようございます。本日はみなさまご多忙の中、お集まり頂きまして大変感謝申し上げます。平成29年度第1回北海道地方独立行政法人評価委員会公立大学部会の開催にあたりまして、一言、ご挨拶を申し上げたいと思います。本日は札幌医科大学から提出がございました、業務実績報告書等に対するヒアリングを行いまして、評価に向けた審議を行うということになります。今回の評価対象でございます平成28年度は、第2期中期目標期間の4年目にあたり、札幌医科大学におかれましては、昨年度の取組を生かし、中期目標の達成に向けて鋭意取り組んできているところかと思えます。評価委員会といたしましても、本日のヒアリングを通しまして、札幌医科大学の取組内容をしっかりと確認させて頂き、今後の札幌医科大学の業務運営の質向上に資する評価が実施できるよう、取り組んで参りたいという具合に考えております。限られた時間での審議ではございますけれども、みなさまの活発な議論をお願いし、開会の挨拶とさせて頂きたいと思えます。本日はどうもありがとうございました。

【事務局】

- 続きまして、札幌医科大学 塚本理事長からご挨拶をお願いいたします。

【塚本理事長】

- おはようございます。本日は、いま部会長の方からご案内頂きましたけれども、平成28年度の実績報告それから平成25年から平成28年の中期目標の中間報告、そして平成28年度の業務実績、財務諸表等の実績評価ということになっております。どうぞよろしくお願い申し上げます。評価委員の先生方におかれましては、これまで大学に忌憚のないご意見・ご助言を頂きまして、我々もそれに基づいて種々改善をしていったところでございます。もとより、十分だといえない部分も残っておりますが、ぜひまた、今年度である平成28年度、それから中期目標、そして財務諸表のとおり、ご評価頂ければというように思っております。
- 我々の大学は、建学の精神で地域医療と医療・医学への貢献ということを掲げてこれまでやってきております。平成28年度に関して言えば、例えば、医師国家試験が例年より少し悪かったということがありますが、看護学科では、それぞれの国家試験の合格率が100%と、他の大学にないような成績でありますので、教育の分野では、そういった成果が出ているというように思っております。また、研究におきましても、評価委員の先生方はご存知かもしれませんが、我々の取り組んでおりました、神経再生医療について、今年の6月に首相官邸の「健康・医療戦略推進本部」で責任者の本望教授がプレゼンテーションしており、大変注目されております。また、この治療そのものは最終段階にきておりまして、できれば来年の春、遅くとも夏ぐらいまでには保険収載になりまして、実際の臨床に使用できる、というところまでできている、というように考えております。こういった研究で

の実績を着実に上げている、というように思いますけれども、こういった面でも、さらに評価委員の先生方からご指摘・ご助言頂ければと思います。おかげさまで北海道ともご助言またはご協力を頂きながら、大学の校舎もずいぶん完成しつつあります。保健医療学研究棟も、今年の5月には移転が終了しております。今建設しております医学部あるいは医療人育成センターの校舎も来年の3月には完成いたします。それから、西病棟と呼んでおりますが、病院の増築の部分も来年の3月には完成いたしまして、来年の4月、5月にかけて一部移転、というようになっております。このように、おそらく施設の面もここ2、3年でかなり変わってくるだろうと思っております。このようなことを基礎としながら、我々も一層努力をしていかなければならない、というように思っておりますので、評価委員の先生におかれましても、今後とも一層ご助言・ご指導頂ければというように思っております。今日は長時間になるとはと思いますが、ご審議どうぞよろしくお願いいたします。

【事務局】

- 塚本理事長につきましては、所用によりまして、これにて退出の方させて頂ければと思います。よろしくお願いいたします。
- それではこれより議事の方に入らせて頂きたいと思います。これからの進行につきましては、谷山部会長にお願いしたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

議事（１） 平成 28 年度業務実績報告書等に係るヒアリング

【谷山部会長】

- それでは、早速議事に入りたいと思います。最初の議事でございますが、平成 28 年度に関わる業務の実績及び第 2 期中期目標期間（平成 25～28 年度）業務実績報告書の内容等についてヒアリングを行います。項目が多岐にわたること、また限られた時間でありますので、ヒアリングを円滑に進めるために、予め、各委員から頂きました質問事項に対する札幌医大の回答内容、資料の 1－2 にございますが、確認された事項や、関連して追加で確認したい内容に関する事項を中心にヒアリングを進めて参りたいと思います。それでは、時間を節約するために、委員毎にご発言をお願いしたいと思います。各委員のみなさまは順番に発言願います。なお、質問発言等に関連して確認等されたいことがあれば、他の委員も自由にご発言をお願いしたいと思います。それでは、この席の順番で田中委員の方から、今回の議題についてのご質問等あればお願いしたいと思いますし、他の委員も関連することがあれば、その都度ご発言を頂きたいと思っておりますのでどうぞよろしくお願いいたします。

【田中委員】

- こういった目標管理のためにやっているのだと思いますが、考え方について、総論的な話になるのですが、お伺いしたいのですが、資料 1－2 にあります私の質問の 36 番ですが、研究支援に係る事務局体制についてなのなのですが、結局平成 25 年にも平成 28 年にも調査して、私の文章のとおりですが、いろいろ経過は書いているのですが、担当する部署を決めれば済むことだと思うのですが、対応としては、総務課が中心になって行くと。それが平成 28 年度の評価でいいですと担当事務局は未だに学務課・産学になっています。それともう 1 つは、資料 1－2 の数値指標の下

から2つ目になりますが、後発医薬品採用率については時代遅れだと思いますし、回答もそのようになっております。ところが、未だに次の中期計画では後発医薬品の使用率を採用しようと思っていると。こういったものは、いわゆるPDCAサイクルを回すものにとっては、時代遅れのものを変えていかないと、PDCAサイクルを回している、というようにはならないと思います。これは私の経験でも、うちの施設でもあることなんですけれども、不都合が出てきたら、やはり変えていくのがPDCAサイクルを回していくことだと思いますので、そのあたりの考え方を大学として、あるいは病院としてどのようにお考えになっているのかお伺いしたいです。突然の質問で申し訳ないですが、私が言いたいのは、変更していかなければPDCAサイクルを回していくことにはならないであろうということなのですが。

【志田事務局長】

- ご指摘のとおり、そのこのところは見直しが必要なところだろうと思っております。研究支援体制の件につきましては、未だに学務課・産学となっておりますが、研究の支援、例えば基礎研究ですとか産学官連携の研究ですとか、そういった意味で、組織・担当部署としてはそういったように列挙しております。やはりこういったものはまずは組織をきちんとつくることが大事であろうという意味で総務課が担当している。まさに今総務課で先生方と協力していきながら、研究支援の体制を検討している最中でございまして、来年度には、何らかの形でできるのかな、というところでございます。

【田中委員】

- 具体的なものというよりも、考え方だと思います。もう後発医薬品採用率なんていうのは、私は時代遅れだと思っている。そもそも知らなかったくらいで、使用率というのが一般的になっているのに、未だに採用率という言葉が残っているということ自体が、という意味なのですが。

【志田事務局長】

- 全体を通して確認したいと思います。

【古谷委員】

- セキュリティに関する質問なのですが、情報センターから回答を頂いていたのですが、先日、平成29年6月23日、ホームページをたまたま見えて、そのようなことがあった、と知ったのですが、ウイルス感染というか、不正アクセスの疑いがある、というようなプレスリリースをしていました。確認しますと、回答は頂いていたのですが、その端末のウイルス対応ソフトの有効期限がきれていたということで、対策もいろいろ回答としては頂いているのですが、7月～8月の上旬に説明会を実施、とありますが、これはもう実施されたのでしょうか。

【附属情報センター 関上副センター長】

説明会ですが、ただいまちょうど各所属から、今回新たに情報セキュリティ担当者というものの、実際の実務に当たる担当者を設置することとしまして、その担当者の報告を現在頂いているところでございます。来週一週間かけまして、セキュリティ担当者に対する説明会を実施する予定でございます。

【古谷委員】

- それで、万全な対策をこれから取られると思うのですが、去年か一昨年も質問したかと思いますが、ネットワークにつながっている PC の正確な台数ですとか、ハードとソフトウェアの管理が完全になされているのかどうか、ということについてはとても大事なことで、対策をうっても全然関係のない PC がネットワークに接続された段階でもう危険度はすごく上がると思います。ですから、そのあたりの台帳管理等々を本当にやっているのかどうかと。これはとても大変なことであるし、実際にその台帳を見せていただいたことがないので、もしそのようなものがあるのであれば、後日でも構いませんので、見せていただければと思います。
- あともう 1 点なのですが、いろんな対策をうった時、どうしても避けられないというのがメールの誤送信であります。鈴木委員が質問しているところもありますが、セミナーで対策もしています、というように書いてあるのですけれども、メールの誤送信というのは、どんな対策をうっても起こりうる単純なミスなんです。これは絶対に取り組みなければいけないと思うので、ぜひその部分をお願いしたい。いままでの信用とか、貴重なものが外部に流出してしまう恐れがあると思うので、ぜひそのあたりをきちんとした対策をとって頂きたいと思います。以上です。

【谷山部会長】

- ありがとうございます。それでは鈴木委員からお願いいたします。

【鈴木委員】

- それでは、私が出した質問事項について、もう少し伺いたいところについてお願いしたいと思います。資料 1-2 の 3 ですが、この後もう一度出前講義について質問していますが、保健医療学部の出前講座、出前講義、これは同一のものではない、ということですね。これは別々の学部で別個に行われていて、管理・運営自体も全く別に行われているという解釈でよろしいでしょうか。

【高山経営企画課長】

- 資料 1-2 の 64 番に記載しておりますとおりでございますが、それぞれ所管している部署も違いまして、また行う目的・効果についても異なるというように整理してございます。

【鈴木委員】

- こういった出前講座などの検証が行われているのでしょうか。

【大日向保健医療学部長】

- 高校出前講座は保健医療学部主催、出前講義に関してはアドミッションセンター主催で開催しております、それぞれ開催ごとに出席者からアンケートのご協力をいただき、今後の改善等につなげるとともに、この講座と効果性について把握しているところでございます。つきまして、検証はその都度行い、毎年実施している状況になってございます。

【鈴木委員】

- 大体高校からの要請からに関しては、応えられているという状況なののでしょうか。

【大日向保健医療学部長】

- 全道各地の高校から出前講義の要請を受けているところですが、それぞれの高校からのニーズに即した形で高校生向けの講義をしているということで、非常に高い評価を得られている、というように考えてございます。

【鈴木委員】

- それと、一つ遡りますが、資料 1-2 の 2 番の「基礎付き科目」と「専門科目」の間には差があるのか、という質問で差はある、という回答でしたが、専門科目は 1 科目 100 点満点、基礎付き科目は 1 科目 50 点満点でこちらのほうは 2 科目の受験が必須、ということになっているわけですが、これは実際に 2 科目受験になってくると専門科目との難易度の差はほとんどなくなってくると考えてよろしいのでしょうか。

【アドミッションセンター 三瀬講師】

- 基礎付き理科だけで受験できる学科というのは、本学の場合、保健医療学部看護学科のみになります。医学部は基礎付きは認められませんし、理学療法学科・作業療法学科は基礎付き理科を選択した場合、もう 1 科目専門理科を取らなくてはならない状態になっております。難易度の問題ですが、センター試験の大学入試センターのほうで、発表しております、その年その年の平均点をみますと、多少でこぼこはございますけれども、どちらも 6 割を目指している、ということです。その中で本学の受験者数であります、看護学科の場合、基礎付き理科のみ受験して社会 2 科目を受験する学生、いわゆる文系ですが、4 割を占めております。合格している人数も大体 4 割ということで、基礎付き理科のみ選択していると有利である、ということは認められておりません。特に成績の上位に固まっているとか、下位に固まっているというようなこともございません。また、もう 1 つ付け加えますと、入学してからの成績を追跡調査いたしますと、いわゆる理系で入学した学生と文系で入学した学生に差は認められません。ということで、本学には幅広い基礎学力それから学習習慣を持っている学生を求めているということに即して多様な学生が入学する。その仕組みとしては機能している、というように考えております。

【鈴木委員】

- 実際のところ、基礎付き科目と専門科目の受験者の割合というのはどのくらいなのでしょう。

【アドミッションセンター 三瀬講師】

- 看護学科の場合は 4 割程度が基礎付き理科の 2 科目、それから社会で受験しております。それから基礎付き理科 2 科目と専門理科という受験者も若干おります。残りの 6 割近くは専門理科 2 科目というようになっております。

【鈴木委員】

- ありがとうございます。あと、14 番のカリキュラム委員会と教務委員会と 2 つ委員会が設けられておりまして、連携も行われているということでしたが、例えば、「新しい授業を作りたい」という

ような教員からの提案があった場合にはどのような手続きによって最終的にできるのかをお伺いしたいのですが。

【堀尾医学部長】

- 新しい科目を作りたいというような場合は、カリキュラム委員会と教務委員会自体非常に交流が強いのですが、実際に新しい授業を入れるというのはカリキュラム委員会の掌握することでありまして、最終的にカリキュラム委員会で認めるわけですが、必要性ということに関しては、両委員会で検討されるわけでありまして、最終的にはカリキュラム委員会が取り扱ってプログラムを作る。そのあと教授会による承認を受ける。このような流れになっております。

【鈴木委員】

- そうしますと、教務委員会というのは、実際に授業が行われた後の評価、ということになりますか。

【堀尾医学部長】

- 授業の評価に関しては、カリキュラム委員会よりも教務委員会の機能が重要になっております。

【鈴木委員】

- ありがとうございました。それから28番、これはなかなか悩ましい問題であると思うのですが、学生からの成績における異議申し立てに対する窓口ですが、文科省からこのような窓口を設置するように言われておりまして、私の大学でも頭を悩ましているところですが、規定はあるということですね。この規定には評価基準しか定められていない、というわけで、学生から「自分の成績はおかしいのではないか」というような異議申し立てがあった場合には、実際にはまだ窓口は置いていないと。実際にこのようなことが起こった場合にはどのように対応しているのかお伺いしたいと思います。

【阿部学務課長】

- 先ほど鈴木委員からお話がありましており、評価基準部分については規定がありまして、その中で定めております。ただ、その規定の中に、ストレートに「異議申し立ての窓口は誰」ということについて記載はございません。しかし、本学の中の取組としていけば、学生には「学生支援ハンドブック」として広く周知はしているところではございますけれども、通称、学担といいまして、学年ごとの担当の教員を定めて、その教員に様々な部分についての相談をしてください、ということを教職員の中でも学生の中でも周知をして、情報として共有をさせていただいているところではございます。その中で、成績に関して異議申し立てなどということがございましたら、今の仕組みを使った中で吸い上げていく。そのような形で考えております。

【鈴木委員】

- 実際にこのような相談が持ち込まれた事例もある、ということはあるのでしょうか。

【阿部学務課長】

- 具体的には、成績の話というよりも、今の仕組みで出てきたということとはございません。

【鈴木委員】

- 学年担当教員というのは、普通大学にはクラス担任というのは置いていると思うのですが、それと同様であると思ってよろしいのでしょうか。

【阿部学務課長】

- クラス担任をもう少し発展させた形ということで、学年ごとでの担当、そして、それをサポートする副担というような形のサポート体制をひいております。

【鈴木委員】

- 担任という形の教員は置かれていない、ということですね。

【阿部学務課長】

- 担任というのは、おそらく講義ごとでの担当ということで、それについてはその講義を主導する担当の教員がおりますので、それと学年担任といった棲み分けをさせていただいております。

【鈴木委員】

- ふつう、担任というのは入学したときに配置されまして、ほとんど名ばかりの担任ということになってしまうこともございますので、あるいは、私の大学では教育指導として別の教員もおいているのですが、あまり機能していない、ということがありますので、そういった場合、このようなトラブルが起きたときになかなか扱いきれないというような事例が出てくる可能性がありますので。このような体制というのは、1つのリスク管理として整えるのがよろしいのではないかと思います。
- あと、37番の科研費の申請率及び採択率ということで、最近は向上していているということですね。レクチャーというのは、実際としてはどのような指導を行っているのでしょうか。

【堀尾医学部長】

- レクチャーとしては、実際に科研費を獲得されている教員が主に担当する、ということになっております。特に若い研究者については、ある程度ノウハウがありますので、それをレクチャーしていただくということになります。なお今年度につきましては、名古屋市立大学の学長の郡先生に来ていただきまして、科研費の獲得についてのレクチャーをしていただく予定でございます。

【鈴木委員】

- それは実際にやはり申請書類を添削するということを行ったのでしょうか。

【堀尾医学部長】

- 残念ながらまだそこまではできていないところ。おすすめといたしまして、お互いに内容を見合う、ということが大事である、ということは私のほうから毎年通知はしているところで、具体的にど

れくらい実行されているということについては把握しておりません。

【鈴木委員】

- 昨今、大規模な大学では科研対策として、専門の職員を雇って、書類や文書の中身までチェックしている。このような職員を採用して、科研費の採択率を飛躍的に上げたような大学もございますので、それについても検討していただければと思います。
- あと、71 番ですが、国際交流の長期の派遣受け入れについて、これはやはりかなり少ないと思います。これは医学部としてはこのような数字はいかがでしょうか。

【堀尾医学部長】

- 本学は道立ですので、公立大学になります。一方で国立大学は文科省の仕切りがあって、非常に国際交流学生を受け入れやすい体制が構築されています。さらに総合大学ですと、大学全体として受け入れるので、医学部にも交流学生が入ってくるというような仕組みがあるのですが、公立大学は非常にそこが弱いところであります。申請資格すらない、というような状況のものもたくさんありますので、そこが非常にネックにはなっている。確かにこの部分は非常に弱いところであると認識しております。

【鈴木委員】

- 患者の受け入れについては国立大学よりかえて札幌医大さんのほうが様々な国から患者を受け入れるような体制ができているのでは、と実感として思うのですが、それが学生間交流だとなかなかうまくいかない、ということでしょうか。

【堀尾医学部長】

- 各協定を結んで受け入れる、あるいは派遣するということは行っているわけですが、今後もっと努力が必要だということだと思っております。

【鈴木委員】

- 学生からのニーズはあるのでしょうか。

【堀尾医学部長】

- 例えば今回の中国、それから韓国へ 5 年生の学生を派遣する仕組みがあるのですが、各 2 名ずつで競争率は約 3 倍となっております。

【鈴木委員】

- それはまだまだ伸ばしていけそうところがあるわけですね。それと、79 番ですけど、現在任期制教員は何名いるのでしょうか。

【小野田総務課長】

- 任期制をとっているのは、ほとんどでございまして、とってない方は2人でございます。教員でいきますと、医学部で330名、保健医療学部で53名、その他、医療人育成センターで18名、合計で約400名となっております。

【鈴木委員】

- それを、「教育」、「研究」、「診療」、「社会貢献」、「大学管理運営」の5項目により評価しているということですね。これは、目標を設定して、評価書を出してもらうことになるんでしょうけれども、評価する方は、何名の委員会で評価されているのですか。

【小野田総務課長】

- 申し訳ございません。資料がないものですから、後ほど答えさせていただきたいと思います。

回答（ヒアリング後、評価委員へ回答済み）

- ・親委員会 7名
- ・小委員会 医学部4名、保健医療学部3名、医療人育成センター3名、無所属3名で、評価している。

【鈴木委員】

- その際には面談とかは行われないのですか。

【小野田総務課長】

- 面談は特に行っていないということです。

【鈴木委員】

- 人数的にはかなりの大人数になりますので、そういう意味では、大きな作業になるかと思いますが、任期制の業績評価といいますと、ただひとえに、任期を再任するかどうかということにしぼって、それは、年俸制には結びついていない、給与面には結びついていないと。

【小野田総務課長】

- あくまでも、業績評価、再任判定ということで、今のところ、給与の評価については結びつけていない状況でございます。

【鈴木委員】

- それではみなさん、現在のところ年俸制という制度の導入というのは考えておられるのでしょうか。

【小野田総務課長】

- そのあたりも、今後検討しなければならないと思っているんですけど、現実的な検討というのはま

だ着手していないということでございます。

【庄司委員】

- 医師の国家試験の合格率について質問させていただいたんですけど、医師の国家試験については目標値を定めていて、94%という目標になっているんですけど、平成28年度に関して言うと、医師の国家試験の実績が91.5%で、未達成であったということだと思います。過去にも、医師の国家試験の合格率が、全国平均を下回ったということはあったんでしょうか。

【堀尾医学部長】

- 平成24年に全国平均が90.2%で本学が全体で90.7%という時がございました。そのときに様々な対策をとるようにしました。平成25年度が92.6%で、それより前に比べて約5%弱くらい低くなってしまったので、その対策をとっていたことがあります。その25年度、24年度については、全国平均をわずかに上回るという形になっている。平成28年度は、全国平均88.7%で全体として91.7%の合格率、新卒者で91.5%となっている。

【庄司委員】

- わたしがちょっと気になったのは、数値目標としては94%という目標を立てて、看護師と理学療法士と作業療法士は全て100%で達成しているが、それが医師は91%で未達成であったという事実が、年度評価にどう反映されているのかということだったんですけど、まず年度評価との関連性がよくわからなかったんですけども、これは質問させていただいた結果、項目で言うと1~29に全て関わるものだっていうご回答を得ている。それを前提にして考えると、1~29については、すべて評価としてAになっているので、ここだけ見てどうこうという見方がいいのかどうか、というのがあるんですけど、年度評価とうまく結びつけられていない、何か隠れちゃっている気がしてしょうがないんですけど、そのへんはどうでしょうか。

【堀尾医学部長】

- 確かに論理的に一部、難しいところがおっしゃるとおりあるような気がします。どうして全部いいのに、なぜ結果が悪いのかということになるわけですけど、実際の担当者から申し上げる点は、なかなか国家試験への対応については、年度でばらつきがありまして、今年度の国家試験が非常に難しかった。受験者数が全国でいいますと、受験者数が非常に増えている。300人か前年度より増えているはずなんですけど、合格率は逆に減ってしまっている。全国的に減ってしまっているということになっています。で、そういうところで、なかなかコントロールが難しいというのはいいわけになってしまうのですけれども、特に今年度非常に困ったのは、留年生がちょうど卒業しましてですね、留年を経験した学生というのは、卒業して国家試験を受けるわけですけど、そうすると17名いるうち、7名が不合格という状況になってしまって、数値的には足を引っ張ってしまっているということになっています。昨年度は非常によかったんですけども、留年して卒業させなかったという部分が、その部分が、28年度の結果の足を引っ張っているという状況が実はあります。だからおっしゃることは非常によくわかりますが、ご指摘の点、非常に正しいというふうには思いますけど、ただ結果とし

て、数値としてはよろしくないということで、大変申し訳なく思っております。

【庄司委員】

- 評価との関連性は、もう少し明確にされたほうがいいのかなという気は。目標の立て方、ちょっと隠れてしまっているから、こういうことがたびたびあることとは思いませんけど、全部 A というのもちょっとどうなのかなと素人考えかもしれませんが、そういう印象を受けました。以上です。

【鈴木委員】

- 今のものに関連した、103 が、全部 A ということでよね、私は、S であっても、それが B になってしまってもかまわないと思うんですけど、たとえば、理事長のあいさつにありました通り、中期目標 21 の再生医療に関しては、ここの部分はあのような業績を挙げたのであれば S でもかまわないという気がするんですが、そこもあえて A にしていると、どうもメリハリが評価につかないということがありまして、これは、こちらで評価をさらに審査する場合でも、非常にやりにくい部分があるんですよ。みんな A となると。S がついてきたら、これ、S をつけたのは、どうして S をつけたんですか、というふうに聞きようがあるんですけど、それを聞くことができないということがありまして、ですから、札幌大さんのもっと全面に押し出すところとか、今回だめだったなというところもあっていいと私は思うんですけど。そのへんのメリハリの部分というのはいかがお考えなのかなと。以前からずっと A だけだったんですか。

【高山経営企画課長】

- 決して、従前からずっと A というのではなく、過去の評価では S だったり、もちろん B 評価もつけております。常々、委員の方々からはメリハリがないということについては、こちらでも承知しております。ただ、所管所管で評価していく中で、今回については、ある一定程度の効果が得られたということで A 評価、結果としてこうなるということであります。もうちょっとメリハリをつけたほうがいいのではないかというご意見については、今後、検討・評価していく際に、参考にさせていただきたい。

【鈴木委員】

- 絶対に 103 項目の中で、札幌大さんがここはよくやったな、できたなと思うところはあったと思うんですよ。絶対にあると思う。濃淡がある。ですから、ここは今年よくやったと思うところはぜひ S を付けていただきたいと強く要望したいと思います。

【谷山部会長】

- 私の方から少し聞きたいことがございますのでよろしくお願いいたします。6 になりますが、後期臨床研修医教育と大学院進学、大学院での 2 つのプログラムを一人の学生が履修しているとなると、それぞれのプログラムで必修・必須のプログラムがあって、カリキュラム・シラバスがあると、これは、今、文科省が進めている実質化ということについて、この 2 つのプログラムを一人の学生が履修することの矛盾といいますか、時間的あるいは内容的な部分で整合性がとられている、実質化にむけ

ては、今後取り組んで行くという回答をいただけてますけど、なかなか実質化というのは難しいのではないかという気がするものですから、その状況をご説明いただきたい。

【堀尾医学部長】

- 大学院進学を勧める理由は、医学というのは発展途上の学問ですし、それを担当する医師が常に研修して、常に研修して問題点を把握するという力が要求されています。そういう力をつけさせるためには、やはり大学院教育が非常に大事であるという風に考えて、後期研修について、もちろん忙しい時期もあるわけですが、いつも忙しいかと言われるれば必ずしもそうではないという部分があります。あるいは、地域に行って、地域の病院でやっていて、時間があるそういう時にネット講義をやっておりますので、eラーニングを使った大学院の課程を行うという理由は、ある程度あります。確かに忙しいときには、併用は難しいということで、お答えの中にも書いてありますが、長期履修制度というのを今後、導入することにしておりますので、さらに整合性を持たせた状態で、今後もこういう教育を行っていきたいと考えております。

【谷山部会長】

- 文科省も勧めている、情報の見える化、うまくやってますよということの一方では、だれもがそのプログラムを見れるよう実質化するということが求められている中において、いろいろ難しさがあると聞いているが、医学においては、特にそういうところが注目されるのかなと思いますので、今後、きちんと整理されることについては、期待していきたいと思います。それから19番目なんですが、TAのことなんですけども、札医大さんにおけるTAの内容、どこのあたりまで教育に踏み込んだ形で、大学院生がかかわっているのかということをご説明いただきたい。

【堀尾医学部長】

- TA、教える練習をするというような意味合いと、経済的な支援、この2つの意味合いがあります。教える練習とはどういうことか、たとえば、教員の授業の手伝いをするあるいは、実習の担当をする、実際に授業をするかというところではないが、積極的に関与してもらう形が多い。実際に個々の学生とふれあう時間が長くなりますし、反応がその場で見えますので、本人にも返ってくる形になりますので、非常にそういう意味では、ティーチングトレーニングになると思います。

【谷山部会長】

- それは、TAの立場にある学生とそれを受ける学生は、それを明確に認識というか、授業を受ける学生には十分周知されているのかなと思うんですが。

【堀尾医学部長】

- すみません、そこの所は多分ちょっと抜けているというか、学生側からは全て先生に見えるのではないかと、今ご指摘いただいて気が付いたのですが、学生側に十分周知はされていない部分がありますので、そこの所は気を付けたいと思います。

【谷山部会長】

- ありがとうございます。それから 94 番目に定員増を今計画されているということで、道との関係もあり、大学関連では一言では答えられないかも知れませんが、札幌大学さんが取り組んでいるところの地域（道）出身者の学生が 70 数%まで確保できているという中で、入試の改革の実績が明確に上がっていると思われる中において、それでも定員増を測る理由というか足りないのですかね 地域医療に関わる学生の数…まあ単純に数で測れないのかも知れませんが その背景を教えてくださいなと。

【堀尾医学部長】

- 私の方からお答えさせていただきますと、定員増と書かれていますが平成 21 年度から増えた部分をそのまま継続するという意味で、これから更に増やすかどうかは書いていません。一応新しい講義棟では 125 名までのキャパシティがありますけれども、ここも道との協議によっています。それから地域で医者が足りないのかというご質問は、実際足りませんということでございます。

【谷山部会長】

- ありがとうございます。他に先生方何かございますでしょうか。
- 次は財務諸表に関するヒアリングに移りたいと思います。これに関しまして確認事項等ご遠慮なくご発言をお願いします。

【庄司委員】

- では私の方から、前に事前に質問をさせていただいた中で 1 点確認させていただきたかったことなのですが本年度は水道光熱費について、診療経費と一般経費があるのですが、水道光熱費が減少していて、その理由として電気及びガスの単価減により執行額が減少したとのご回答をいただいたのですが、電気及びガスの単価減の理由をご教示いただけますでしょうか。

【高山経営企画課長】

- こちらの記載についてですが、原油価格の上昇によりまして、前年の単価に比べて、電気ガス共に料金単価が減少したために執行額が減少しております。

【寺田経理係長】

- 補足させていただきます。ガスにつきまして原料調整費という制度がございます、原油価格によって増減する部分がありまして、それが前年度と比べて安くなっているのが単価が下がっている大きな要因となっております。電気も下がっているのですがガスの方が割合としては金額的な大きな要素となっております。

【庄司委員】

- 経営努力の結果下がったというよりは、制度的な要因でたまたま今回は下がったという理解で良いですか。

【高山経営企画課長】

- 電気使用量は若干減少しておりまして、若干は節約の要因があるかと思いますが、委員の仰ったとおり主な要因といたしましては単価の外的要因減が要因となっております。

【庄司委員】

- はいわかりました。あと事前に質問していない事項なのですが、92P、平成28年度年度計画で言う83の所なのですが、自己点検評価（平成28年度実施状況）2個目の※の交付金算定額の記載の中に 特殊要因として（光熱費等の増減経費分）+10億1千2百万円を除くという記載の意味がよく判らなかったのですが。

【高山経営企画課長】

- 特殊要因の記載についてですが、平成24年に第2期中期計画を作る際に道からの交付金を算定する額を整理しているのですが、それ以降、光熱費の単価等増嵩経費について発生したものですから、特殊要因として整理しまして、その部分の10億1千2百万円については除いたベースで整理して記載しているところです。

【庄司委員】

- 増項部分と言うことはこの部分が増えたということですか

【高山経営企画課長】

- この部分に関しては予見不可能という事で特別に道の方から増嵩分に関しては別に大学運営費交付金を措置していただいた経過がございます。それを除いたベースで整理しております。

【庄司委員】

- はい。もう1点なのですが、96P、平成28年度 年度計画88番 自己点検評価（平成28年度実施状況）中ほど、経費節減への取組促進「収支不足が見込まれたことから、予算の執行を保留した」と記載がありますが、実際に保留したということでしょうか。

【高山経営企画課長】

- はい。一定率を乗じまして積算して執行を停止しそれで収支不足を埋めたということでございます。

【庄司委員】

- 予算の執行を停止して支障はないのでしょうか。

【高山経営企画課長】

- 所管で予算執行を停止して事業ができない、得たい効果が得られないとなると本末転倒な話ですので可能な限り期待する効果を発現することに考慮しつつ予算執行残を出すことに努力していただいた

結果でございます。

【庄司委員】

○ 28 年度は運営費交付金は前年度に比べて 2.2%縮減になっていますね。

【高山経営企画課長】

○ はい、決算上はそうになっています。

【庄司委員】

○ 目標では 1%の縮減となっていますが

【高山経営企画課長】

○ ルール算定上、人件費については精算方式になっていますので、当初予算よりも退職者が少なかった場合、実際の精算行為でルール計算すると結果として 2.2%減となっております。

○ 大学運営費交付金総額は何に使っても良いということではなく、人件費については精算することになっております。それらを総じて 2.2%減となっております。

【庄司委員】

○ 経常で削減した部分もあるし、自然減もあって合計で 2.2%減という事で宜しいですか。

【高山経営企画課長】

○ そのとおりです。

【庄司委員】

○ 判りました。以上です。

【谷山部会長】

○ 私の方からも聞きたいことがあるのですが、財務諸表資料 2-1 1P 資産除去債務の内容 アスベスト除去 今進行中の建物の取り壊した部分の処置の仕方についてですが。

【高山経営企画課長】

○ ご質問は、アスベスト除去は今回の施設整備に伴って出てきたものかということでしょうか。これは今回の施設整備によって出てきたものではなく、現存の施設の除却時を考慮したものでございます。

【谷山部会長】

○ 今度の建物の更新計画には直接関係しないということですか。

○ 現在アスベストの使われている建物はないということでしょうか。

【影山管財課長】

- 対象件数の中で不確定なものはありますが、既存棟の中で臨床教育研究棟などアスベストを使用している可能性があるので、今後除去費用が見込まれるものに対してここで計上しているということになります。

【谷山部会長】

- はい、わかりました。ありがとうございます。他に委員の方々ご質問等ございますでしょうか。なければこれでヒアリングは終了したいと思います。
- 誠に長いこと皆様におかれましてはお忙しい中ご協力いただきありがとうございます。感謝申し上げます。

議事（２） 平成28年度業務実績報告書等に係る意見交換

【谷山部会長】

- ただいまより、議事を再開したいと思います。
- ヒアリングの際に、財務諸表含めて業務実績についてのご回答を大学からいただきましたが、その内容を含め、意見交換したいと思います。
- 鈴木先生から、全てAはどうなのかという話もありますし、前にもお話ししましたが、札幌医大としてメリハリ、要するに札幌医大としての個性というのでしょうか、建学の精神にも関係することがあると思うのですが、道民の大学としてどう理解してもらうかということの1つは、計画の立て方・進行・結果・それに対する自己評価というのが明確になるもの、メリハリのある形で報告していただければという意見だと思います。
- もう1つは、田中委員から発言がありましたが、PDCAサイクル、これを意識した計画の立て方ですとか、評価まで踏み込んだ形で明確にするべきじゃないかという意見。私もそう思います。計画と実行までは記載されていますが、それに対する自己評価。良かった、悪かったではなく、その評価も裏付けのあるものにしないと、道民はなかなか納得してくれないのではと思います。
- 医療の部分に関しては、再生医療ですとか非常に先端的な、世界を凌駕するような、リードするようなものもあります。そういったものもちゃんと計画そして実行、チェックさらにアクションという評価をしていただけると道民も応援してくれるのかなという気がします。
- ところが、表を見ると全部Aですので、全部いいのか、あるいは全部どうなのかという印象を与えてしまいます。私の感想ですけども、せっかく取り組んでいるところが埋没してしまうとかそういう印象を持っています。恐らく委員の方々もそういう認識を持っているのかなという気がします。色々ご意見をいただければと思います。
- 計画の立て方から結果、その評価の仕方まで事前に計画しておかないと、出たところ勝負の評価はなかなか難しいと思います。論理的にまとめきれない気がします。鈴木先生はそのことについてお考えがあると思いますが、いかがでしょうか。

【鈴木委員】

- 評価については、国立大学はかなり苦しめられていると思いますね。
- 国立大学の四段階評価はC、B、A、Sと他も同じだと思いますが、今、大学はこの差別化というのでしょうか。大学自らが自分たちの柱を立てて、その戦略、重点領域に対して大学は特に力を傾注しています。
- ですから、満遍なくやっていくのではなく、「うちの大学はこれとこれとこれは力を入れてやる、他は程々にやる」という計画を立てまして、重点戦略の部分は特に力を入れて、しっかりやったと思ったら、Sの評価をつけるなどをしないと、文科省から「全て3ばかりつけているけど、なぜ評価が3ばかりなんだ」と、そういうことを言われます。ですから2や4をつける、そういうふうに評価しておかないと、評価する側からしても非常に評価しにくいというお叱りを受けるということでございます。
- そのようなわけで、この報告書を見ていても、今、札医大は何に力を入れているのか、よく見えてこないというのがありますよね。その部分が見えるような報告書を出していただきたいと常々考えております。
- ですから、その結果がBになっても仕方ないと思います。それは次また改善すればいい話なのでね。Bをつけることに対する恐れ、Sをつけることに対する憚り、そういったものが報告書には滲み出ているように見えます。

【谷山委員長】

- 田中先生も以前、同様の発言をされていましたが、いかがでしょうか。

【田中委員】

- 項目が多すぎるのではないかなと思います。鈴木先生のおっしゃった話に似ていますが。
- 例えば、組織的に言えば、うちの場合だったら「病院の方針はこの様に立てます。それを達成するためにこの部署ではこれやります。この部署ではこれやります。」という話が出てきます。そういうのが全部書いているので、大学の方針というか、病院の方針というのが見えてこない、見えづらいです。その部分が、現場でやっていることもKPIのような形で上がってきて、全部が目標値になって、つまり目標になってしまうので、そうすると先ほど庄司先生がおっしゃったような、本当は医師の国家試験の合格率91.8%という結果が薄まってしまう、Aの評価に見えてしまいますよね。本当は目標を達成していないのに。大学にとって合格率は大きな問題ですし、そこのやり方じゃないかと思います。

【谷山部会長】

- 要するに色々な案が出てきて、「これも良かったあれも良かったトータルで良かった、ただ見ていくとこういう穴があった、これについてはトータルでいいからいい」という話にはならないと思います。ですからヒエラルキーというか、1つの目標を立てて構成していく、その事業体の組み立てをどうするかというのが骨子としてないと成績は成績、国家試験は国家試験、そのレベルでいうと、色々な問題を抱えながらも、トータルで見えていくとAの評価ではないかという話になりますよね。

- そうなると、さっき庄司先生がおっしゃっていたような疑問が湧いてくると思います。なかなか難しいとは思いますが。私は大学の評価に対する評価もさせてもらっていますが、かなり厳しいです。まあ評価に対する評価ですから。評価がきっちりされてないことの評価ですので。実際の評価ですが、事業を実施したことの結果に対する評価ではなくて、大学は各々自分たちがやったことに対する評価の仕方を評価しています。そこに矛盾があるとなるとかなり厳しい評価をせざるを得ないということになります。言葉は悪いですが自分たちのやっていることにお手盛りで評価してるような大学もないことはないです。恐らく悪い事例として報告されるということもありまして、その中で委員の中には評価疲れして疲弊しているのではないかとという裏の話もあります。そういう方向で行っているということは予算等に直結してくるということですね。避けて通れない状況であると思います。
- 何か他に意見ありますか。

【鈴木委員】

- 報告書は実際に来年度の予算に影響を与えるものなのですか。運営費交付金の額に影響が及びますか。

【事務局】

- 直接にはリンクしていません。国の場合は競争をしてもらってという形にはなっていますが、北海道の場合は公立が一つというのと、交付目的自体が地域医療それから教育、道の大学という役割を担っていることに対するものですので、評価によって影響を受けるというスキームにはしていません。平成24年度に作ったルールで運用しています。

【鈴木委員】

- そこですね、やっぱり。1校しかないので差別化できない。

【谷山部会長】

- 国は毎年1%削減をまだ続けていますよね。

【鈴木委員】

- いや、今年は中止していますね。周りからもかなり叩かれましたからね。1%の削減というのは。

【田中委員】

- 北海道は未だに交付金の削減をされているのですか。

【事務局】

- そうですね。

【鈴木委員】

- でもあれもずっと削減していくわけにいかないですよね。どこかで止めなければならない。その目

処が全然立っていない。

【事務局】

- ルールを決め直すと言うことが必要となります。

【鈴木委員】

- 札幌医大も財政的には苦しくなっていると思うのですが、普通の大学の場合はそれに変わってプロジェクトを立案していますね。それを文科省に持って行って、こういうこと考えて、実施するのでお金をつけてくださいと言って上手く説得できたら予算がついてくる、そういうのは運営交付金以外でついてくるのでしょうか。そういった予算の申請の仕方は医大においてはしないのでしょうか。

【事務局】

- 例えば、道がどうしても、今医大がやっている枠組みを超えて、更に地域医療にこういった部分で協力をしていただきたいとかがあれば、当然道として予算を措置します。運営交付金の範囲内でやってもらうこととなるので、基本的には目的に沿った形ということになります。
- あとは、先ほど話にあった交通費とか、人件費とかに関しては、交付金のルールの中でしっかり精算してもらいます。

【鈴木委員】

- 再生医療は医大が意欲的に進めている研究プロジェクトだと思いますが、あれも完全に交付金の予算の範囲内でやっているのですか。

【事務局】

- 企業との連携を医大が進めて、国の科研費を獲得して事業を行っています。

【田中委員】

- これから共同研究という形でやっていくということ、産学協同というのはそういうものになっていきますよね。大学はきっと補助金が出るといっても、研究費が大体人件費に消えてしまうわけですよね。地域医療に貢献してくれというと、医者がいないことにはどうしようもできないので、医者を雇うのに、ある講座10人のところ11人にするとか、そういう形になっていくのは一般的ですよね。

【鈴木委員】

- 平成21年度に、うちは定員を時限的に増やしました。30年度以降もそのままで行こうということとで、国に申請しています。国の許可が必要です。定員増やしたら当然かかるお金も増えていきますよね。その経費は道が措置するのですか。

【事務局】

- 定数を増やすのにかかる経費は、ある程度道としても費用負担について協議しなくてはならないで

す。医大が全て自前というのは、経営的には難しいのが現状です。

【鈴木委員】

○ 30年度以降もそれで維持するという方向性を、道は了承しているのですか。

【事務局】

○ それはこれからです。今、話は進んでその方向で行くということになるかと思います。ただ、いずれにしろ暫定措置ですし、国が定数を決めますので、国の了承を得なければなりません。

【鈴木委員】

○ 道がその財政的なお墨付きを与えれば、国は認めるのでしょうか。

【事務局】

○ まだ判断できない状況です。

【谷山部会長】

○ 法的にきちっとした定員は制度として組み込まれておらず、定員のプラスアルファの部分は、いつでも暫定措置が終了する可能性があるということは、大学としては大変ですよね。いつ終わるかわからないということもないでしょうけども。何年か後に削減されることになれば、先を見越した計画はなかなか難しい。札幌医大だけでなく、全国の医学部がそういう対象になっているわけですから。

【事務局】

○ 定員については、ある程度の年数は維持できるシステムにはなっています。来年すぐどうなるかということはない状況です。

【鈴木委員】

○ 公立大学の定員は、本当にやっぱり各自治体に任されているのですね。最終的に国に許可を求めているという話ですけども。文科省にもありますよね。公立大学の部署。確か職員二、三人しかいなくてこじんまりとしたところだと思いますね。

【田中委員】

○ 札幌医科大学の収入って言うのは道からの補助金と運営費交付金。それと病院収入ですよね。

【事務局】

○ 後は大学の授業料収入等です。

【田中委員】

○ そうですよ。病院収入というのは、僕たちも来年診療報酬の改定ありますけども、減っても増え

ることはないだろうというのが大方の予想で、そうすると値上がりしてくわけですね。黙ってる分には。かといって人件費は上がってきますよね。

【事務局】

- 基本的には大きく増えないと思いますが、ベースアップ分がありますから、若干増加すると想定されます。

【田中委員】

- 経営的にも、収入源は今の枠でしかないわけですね。制約のある中でやっていますから。一般の外来患者を大きい病院は診るなど言われているのは困ります。入院も重症患者しか診るなどいうような、結果的にはそういうことになっていきますね。
- そうすると制限されているのでなかなか難しい状況、つまり特定機能病院制度ですけど。そして値段、例えば1000円の診療行為に対して、うちのはサービスが良いから2000円ほしいと言っても、もらえるわけがないですから。

【谷山部会長】

- 特定の治療技術を持っている分野で勝負をかけるというのもなかなか難しいわけですね。

【事務局】

- 結局、診療報酬額が決まっていますし、毎年改定されることに加えて、先生がおっしゃったとおり役割分担がされていますので困難な状況です。あとは札幌医科大学が教育・研究が使命になっていますので、あくまでも経営という観点だけで取組を進めることにはならないですし、大学にも負担が生じることの厳しさはあります。

【谷山部会長】

- 先ほど鈴木先生も言っていましたけど、再生医療という世界のトップを走る先進医療の提供があったとしても、それが経営には直接跳ね返ってこないということですね。

【事務局】

- 今回のその再生医療の部分は、実用化されればそれなりの収入は得られると思われます。

【田中委員】

- 収益部門の一つになるのではないですか。

【古谷委員】

- 疑問なのですが、札幌医科大学が道立だということを、うちの社員は知らない。
- 「札幌医科大学は道立だからあなたたちの税金が使われている」と言っても、北広島市民の社員が「私の税金は使われてない」と言うので、「そうじゃなくて、道立だから」と言いました。

- 私もずっと札幌に住んでいて、正直名前知らなかったですね、お恥ずかしながら。本当にうちの社員だけがおかしいのか、道民皆が札幌医大を道立だと認識しているのか、道庁職員の人に聞いてみたいと思いました。

【事務局】

- 北海道のPR不足ではないかというのはあるかもしれませんが、認識されていないというのは個人的に感じます。

【古谷委員】

- 道民の税金が使われている、だから地域医療もしっかりやるということを、周知徹底している状況が意外と見られないのかなと正直感じています。

【事務局】

- 各地方のお医者さんが今必要で、医大の方にお医者さんをお願いしますと言ってくる首長さんとか、関係者の方々はその辺は十分認識いただいております。ただ、それが広く周知されているかとなると難しいところがあります。

【谷山部会長】

- 地域医療で医者不足と報道がされると、一般論として北海道庁の役割が注目されます。ですから、その中心的な役割を担っている札幌医科大学の位置づけを、道としては明確にするべきではないかなと。
- 報道機関に対しても、少なくとも地元の報道機関においては、いかに貢献しているかというのをアピールするというのも一つの方法ではないかと思います。
- 昔から札幌医科大学という位置づけが地域医療との関連の中で、明確にアピールされているかはちょっと疑問には思っております。

【田中委員】

- 広報は大事だと思います。札幌医大も最近、力を入れていますね、色々な形で。各講座の教授があるいは助教授が講義するなども含めて、色々な意味で札幌医科大学はやっていると思います。広報の重要さというのは、そこにあると思いますし。しかし、私は、札幌医科大学出身ですが、未だに札幌医大ってのは市立だと思っている医学部関係者もいますからね。残念ながら。
- 私たち医者だけが集まって、地域の医療の関係で話をすると、皆さんも当然北海道に住んでいるため知っているので、札幌医科大学が北海道における地域医療を一番担っていかないとならず、実際にそうした取組をしているのは札幌医科大学だと知っていると思います。
- だからその辺のことも、自分たちの税金も使われているのだから、もう少し業務の実績報告に対して注目しても良いような気がします。

【鈴木委員】

- さっき私が質問した札幌医大には留学生があまりいないこと、医療活動としては。しかし、北大医学部よりも自由な診療ができるイメージがありますよね。ロシアから患者を受け入れたとか、あの件も北大が受け入れられなかったのでしょうか。
- 更にさかのぼれば、言って良いのかは分かりませんが初の心臓執刀。あの件も他の医大ができないのを札幌医大が実施したという例がありますよね。
- 国立大学医学部から見たら、診療が自由に行われているイメージがありますね。そういう強みをもっています。その部分はこれからも強く打ち出していけば良いと思います。公立の医学部は他には何カ所ありますか。

【事務局】

- 8カ所あります。

【鈴木委員】

- 公立か市立か私立というのは誤解があって、私は小樽商大ですけど、本州に行ったら市立大学に思われています。
- 私は前任校が広島大学でしたが、広島大学から小樽商大に移るときに、広島大の職員に「これ書いてください先生」と言われて、何か聞いたら辞職願を書かされそうになりました。辞職ではないし、配置転換なのですが。国立同士じゃなく市立に行くと思われて辞職願を渡されました。国立大の大学職員も小樽商大のことを市立と思っていたということがありますね。誤解はどこにでもあるのではないですかね。でも認知度は全国的にも非常に高いですね、札幌医大は。

【谷山部会長】

- 知らない人は本当に少ないと思います。ただ道立ということを知っているかとなると、あまり知られていませんね。

【鈴木委員】

- 利尻島に研究所があるんですか。

【事務局】

- かつて、臨海医学研究所が開設されていました。

【田中委員】

- 学生実習用にもありますが、ウニの細胞が分解していく過程を研究していましたね。

【鈴木委員】

- それは医学と関連付けてやっていたのですか。

【谷山部会長】

○ もう廃止になりましたよね。

【事務局】

○ その通りです。

【鈴木委員】

○ 臨海医学というジャンルがあるのですね。

【田中委員】

○ 細胞学とかの研究をやっていたと思います。

【谷山部会長】

○ 基礎科学の研究を使うということで、医学に直結したものではないという説明を聞いたような気がします。

【鈴木委員】

○ 札幌医大が持つ研究所というのはそこですか。

【田中委員】

○ 大学の外にあるのはそこだけですね。

【鈴木委員】

○ 一つだけだと大変ですね。

【谷山部会長】

○ 研究所をもっと外に持っていたほうがいいのでしょうか、維持管理費の面で、昔とは違ってなかなか簡単にはいかない時代になっていますね。ここしなければいいのですが、色々なところで同じようなものが出てくると、特色をどう出すかという点に関して、アイディアだけではだめで、どうしても人・物・金というのがついていきますよね。経営的には難しいと思います。

○ それでは、他に何もなければこれで意見交換を終了したいと思います。今後のことですけども、札幌医大の業務実績内容について、追加の質疑等がある場合には、後日事務局からメール送付される様式を、来週火曜日、8月1日までに事務局あてに返信をいただければと思います。

○ また、業務実績内容に対する意見交換、いわゆる S,A,B,C の検証については、次回の部会が8月の末にございますが、そこで評価を決定しなければなりませんので、限られた時間で議論を進めるためにも、本日の議論及び今後の皆さんからの追加の質疑等を踏まえて、私の方で整理をさせていただきたいと思います。これは例年通りやっていることでございますが、評価とともに次の部会までに各自に送付させていただくということを、ご了承いただきたいのですがいかがでしょうか。よろしいでし

ょうか。ではそのようにさせていただきます。

- 全て議事が終わりましたけども、全体を通して何かご発言あればいただきたいと思います。なければ最後の議事でございますが、今後のスケジュールについて事務局の方からご報告をお願いします。

議事（３） 今後のスケジュールについて

【事務局】

- 資料３のスケジュールにある、次回の公立大学部会の開催についてですが、８月２２日（火）の９時半から、道庁の二階の総務部会議室で開催します。予定している審議案件につきましては、スケジュールの中にも書いてありますけども、平成２８年度評価結果、平成２８年度財務諸表及び利益処分の承認に係る意見について、札幌医科大学の増改築に伴う不要財産の道への納付の認可に係る意見について予定しております。
- 今年度につきましては、この審議案件の他に平成３１年度から第３期中期目標を立てなければなりませんので、この策定方針案について意見を伺うことを考えておりますが、本来であれば今日、この方針案を示したいと考えておりましたけども、資料作成が遅れておりまして、本日の会議では資料配付が間に合わなかったので、後ほど日程調整をさせていただきまして、個別に資料のご説明に伺いたいと考えておりますので、よろしくお願いします。
- 次に評価委員会ですけれども、部会から１週間後の８月２９日（火）の午前１０時半から、これも道庁２階の総務部会議室で開催したいと考えております。
- ここでは各部会で決定しました事項の報告を受けるとともに、不要財産の道への納付に関する評価委員会の意見の決定を行う予定です。そしてスケジュールには記載しておりませんけども、平成３０年４月から地方独立行政法人法の一部が改正されます。この改正に伴う手続きに関連して、評価委員会と部会を開催しなければならなくなることもあります。この件に関しましては分かり次第、お知らせしたいと思いますのでよろしくお願いします。以上でございます。

【鈴木委員】

- この不要財産は利尻島の研究所ですか。

【事務局】

- 違います。これから工事を始める大学の施設ですね。解体工事を実施するのですが、それを一度道に返納して道が解体するための手続きです。

【谷山部会長】

- よろしいでしょうか。ただいま事務局から報告がありました。スケジュール含めてですけども、質問があればいかがでしょうか。

【鈴木委員】

- ２２日は９時半ですね。

【事務局】

- 22日は9時半です。改めてご連絡をします。
- 今ヒアリングの中で古谷委員からお話のあったパソコンの台帳等、準備ができましたけどよろしいですか。

【谷山部会長】

- ではご説明願います。

【法人事務局】

- パソコンだけの台帳というのは作成しておらず、こういった形で、パソコンも含めた全ての備品の台帳になっています。なお、備品とは購入価格が10万円以上のものとなっています。台帳の中からパソコンだけのデータを検索することも可能ですが、データの入れ方として、登録名称を「PC」や「パソコン」などにしており、「PC」で検索しても、「PCR」とか全然別なものが抽出されたりするので、パソコンだけのデータをすぐに取り出すのは、時間的に難しい状況です。
- 今回の事件でもパソコンをネットワークとどう繋いでいるかというのが問題になりますが、情報センターにパソコンをネットワークに接続するために、備品として買ったものと私費で買ったものを持ち込むことがあります。そういったものも含めて、ネットワークに接続するものについては申請をしてもらうことになっておりまして、その申請の台帳と言いますか、リストはございます。
- ただ、これが全て網羅できているのかどうかというところが、正直言って不正確なところがあるということですので、今回情報セキュリティ担当者を各所属に設けて、その現状の把握から進めていくということで、再発防止策を立てるとともに、先ほどのご質問があった説明会を、来週から開催していきたいと考えております。

【古谷委員】

- その会議は本当に大変だと思います。自社でもすごく大変なので。実際はそのライセンスが必要なのですが、ライセンスのバージョンも当然違うし、OSも多分バラバラになっていると思います。実際そのパソコンはどんなOSで、どんなソフトが入っているのかということまでは、管理できていないのだと思いますが、管理していないとなかなか対応は難しいと思います。

【法人事務局】

- 今回OS、バージョン含めて調査を実施することとしております。

【古谷委員】

- ぜひその辺きっちりやらないと多分大変なことになるのではないかと思います。

【法人事務局】

- 今回、特にウイルスソフトを導入していたのですが、有効期限が切れていたという状況でした。

【古谷委員】

○ それ単独で入れていますよね。

【法人事務局】

○ その通りです。ですから、そういうところも大学によっては、ウイルスソフトを大学で一括調達して入れてもらうところもあるので、参考にしながら対応したいと考えています。

【古谷委員】

○ 普通はそういうサーバーを立てて、そこにウイルスチェックを、要するに自動的に定期的な更新をするのが一般的かなと思います。

【法人事務局】

○ それもありつつ、ウイルス対策ソフトを各自が導入しています。事務局職員は一括導入ですが、教員、病院職員などには、各自入れてもらうようお願いしています。

【古谷委員】

○ そうすると、今回のような事故は発生しますよね。同じ事故は次から次へと起こる可能性はあるということに。難しいですね。期限が切れているか、最新の状態になっているかどうかを、各自に任せているのは無理があると思うので、機械に任せて監視した方が良いのかなと思います。

【法人事務局】

○ ありがとうございます。

【田中委員】

○ 今の話を聞いていると、病院のシステムも一緒にインターネットにつながっているのですか。病院のカルテも含めて。

【法人事務局】

○ カルテは全く別の病院のシステムで管理しています。

【田中委員】

○ それともう1点、システムを管理する部門というのはあるのでしょうか。

【法人事務局】

○ 情報センターが担当しています。

【田中委員】

○ 何人くらいでやっていますか。

【法人事務局】

○ 現在、情報系の担当は5名です。

【田中委員】

○ これだけの組織で5名というのは少ないのかもしれないですね。

【谷山部会長】

○ クラウド化はされていないのですか。

【法人事務局】

○ セキュリティの面から今は考えておりません。

【鈴木委員】

○ サーバーは放っておくとどんどん増えてくるでしょう。それも不明なサーバーとか不明なものの名残が。そういったサーバーの把握は難しいですね。

【法人事務局】

○ 今回の事象を教訓にして、改めて見直ししていきたいと思います。

【鈴木委員】

○ 札医大では、就学支援システムのような授業の休講情報や、宿題、小テストなど、そういうものも全部ネット上で管理している支援ソフトが、かなり普及してきていますね。

【法人事務局】

○ 学生サポートシステムというアプリで、学生が情報を選ぶようなシステムを作っています。

【鈴木委員】

○ 独自で作っているのですか。

【法人事務局】

○ 独自のものは把握していません。

【谷山部会長】

○ 情報管理は避けては通れないですね。全体でコントロールするのと、各部門の特徴を生かすということなど、色々と多面的な対応をしなければならないので。

【鈴木委員】

○ 文科省はすごく神経質になっていますよね。情報セキュリティに関しては。特別に講習会開くな

ど、かなり厳しく国立大学には指導してきていますよね。大学をステップボードにして、パソコンにウィルスが感染するという事例が発生している。ですから文科省としては神経質になっています。

【谷山部会長】

- ありがとうございました。よろしいでしょうか。それではこれで本日の審議については全て終了いたしました。以後、進行を事務局よりお願いいたします。

【事務局】

- ありがとうございます。一通りの議事が終了いたしましたので、閉会に当たりまして、成田より一言ご挨拶申し上げます。

【成田室長】

- 本日は、谷山部会長を始め、委員の皆様には大変熱心に長時間にわたり、ご審議いただきまして、ありがとうございます。
- 今後、業務実績評価などに向けた作業となりますが、委員の皆様には引き続きご協力ご指導願います。

【事務局】

- それでは以上をもちまして、平成29年度第1回公立大学部会を終了させていただきます。長時間にわたりましてお忙しい中、ありがとうございました。